



## 山中に穴掘り暮らした男の二〇〇日

かつて私の家は宿坊のかたわら商店を営業しており、絵葉書も販売していた。最近目にすることが増えた、『大正時代』や『昭和時代』の話である。そんな記録に残さないまま記憶が失われつつある時代の絵葉書について調べ眺めていると、ふと不思議な語句に目を引かれる。

「御嶽山上ニ於ケル穴居生活」

写真には三角屋根の建物。別の御岳山だろう。だが、同じ建物を写す絵葉書には、武藏國御嶽山 村井弦齋先生の居穴 とある。この御岳山だ。居穴とは? そして村井弦齋とは? ?

村井弦齋(むらいげんさい)。本名は寛(ゆたか)。文久三年(一八六四)生、昭和一年(一九二七)没。愛知県三河の武家出身。明治維新後に上京し英才教育を受け、若くして渡米。帰国後はジャーナリスト、小説家、編集者と幅広く活躍した。何故このような文化人が御岳山中で穴居(けつきよ)するようになったのか。その発端は、弦齋の「食」にまつわる探究心であった。

弦齋の代表作『食道楽』(明治三十六年(一九〇三))に発表された小説で、男女が食を通じて惹かれ合うお話、なのだが、物語に必ず料理が調理か食材の話がついてまわり、都合六百余種もの食物が登場する。連載時点では人気を博したが、単行本においては、調理や食材についての注釈、卷末付録に栄養分析表、メモ欄までついて、もはやレシピ本。この斬新さも受けけてか大ヒットし、財を成した弦齋はありとあらゆる料理を食す美食家としても名を馳せる。ところがある時、食と健康的因果関係、病気への関心から、火を使わない生食、木や草を中心とする木食、いっそ食べない断食など、いわゆる「食

物療法」の類を取材し研究、自らを被検体として実践はじめる。その末に目指したのが、自然のなかで自然を食して生きる「天然生活」。その舞台として御岳山を選んだのだ。

入手したのは雑誌『婦人世界』。明治三十九年(一九〇六)に刊行された女性向け情報誌の草分け的存在で、主に料理や裁縫、流行のファッショング写真や挿絵、連載小説やコラムなどが掲載される。弦齋はこの雑誌の編集顧問を勤めながら記事も執筆しており、大正十年(一九二一)二月号から「武州御嶽山に於ける私の山中生活」と題した連載をはじめめる。その第一回の冒頭を要約してみよう。

〈大正九年八月十二日〉。天然生活を望んだ私(弦齋)は、関東近郊の山々からまず交通の便の良い御岳山を選び、朝とともに宿坊「西須崎坊」へ赴いて話をしてみると、神社の許可も得てもらえた。翌日下山、十四日には道具一式を持って再登山。テントでの山中生活を始めたのだ」という。

すべてが克明に描写されているとは思わないが、あまりにもスムーズ過ぎやしないか。弦齋が著名人であつたとはいえ、未だJR御岳駅もケーブルカーもない観光地として開かれる前の御神域の山で、こんなに都合よく事が運ぶものだろうか?

というわけで、ひとつ仮説をたててみる。当時、弦齋が住んでいたのは神奈川県平塚市。JR平塚駅南の海側、現在の八重咲町から松風町にかかる一万六千坪もの土地に庭園や畑を営み暮らしていた。その一部が村井弦齋公園として残っている。そんな白砂青松の平塚海岸と、紫幹翠葉の御岳山をつなぐものがある。「御嶽講」だ。当誌読者の方には言うまでもないが、「御嶽講」は武藏御嶽神社を崇敬する村単位などで結成される団体を指す。寛保四年(一七四四)には講の代表者が当社を參拝する「代參」が行われた記録があるが、その際、参拝者は五穀豊穣や講中安全の祈禱を受け、御師の宿坊に泊まる。別の時期には御師が講のもとへ訪れ、日々に御札を配つて廻る。時代は変われば、この講と御師の往来が現在まで続いている。

さて、弦齋が訪れた「西須崎坊」。この西須崎こそ、現在も平塚周辺の御

紹介し、眺望や自然環境を美麗な表現で描き伝えた弦齋は、御岳山の近代史において、当山の知名度を上げ来る山者を増やした人物と言つても過言ではないだろう。

ところで。そんな弦齋のものを訪ねた人たちは「口を揃えて、「こんな所にひとりで居らして氣味が悪くありませんか」と聞いたそうだ。この御岳山中で「こんな所」呼ばわりされ、猛獸や天狗が出そつともいう不気味な場所。それは一体どこなのだろうか?」

次回「長尾の峰といふ處」へつづく。

(文:権禰宜 服部朋也)

△取材協力▽

西須崎坊蔵屋 当主須崎裕氏 通子氏

△主要参考文献▽

黒岩比佐子『食道楽』(岩波書店、平成十六年)

村井弦齋『武州御嶽山に於ける私の山中生活』(『婦人世界』第十六卷 第二号~第六号(実業之日本社、大正十年))

△参考文献▽

黒岩比佐子『食道楽』(岩波書店、平成十六年)

村井弦齋『武州御嶽山に於ける私の山中生活』(『婦人世界』第十六卷 第二号~第六号(実業之日本社、大正十年))



弦齋は約二百二十日もの間、山中生活を営みながら山々の散策や神事への参列、宝物殿の拝観などをして御岳山を満喫している。我が世の春を謳歌していた文化人が突然、山中で仙人のように暮らしているらしいという話は注目を集め、取材や野次馬もやって来た。それが新聞などに掲載され、口コミでも広まっていく。雑誌登場部数の増減については不明だが、すべて広告戦略の内だったのだろうか。ともかく、連載において神社の由緒や山の名所を

くくなつて良いとのこと。

弦齋は約二百二十日もの間、山中生活を営みながら山々の散策や神事への参列、宝物殿の拝観などをして御岳山を満喫している。我が世の春を謳歌していた文化人が突然、山中で仙人のように暮らしているらしいという話は注目を集め、取材や野次馬もやって来た。それが新聞などに掲載され、口コミでも広まっていく。雑誌登場部数の増減については不明だが、すべて広告戦